



人の死に触れた時、不思議とその方の生き様や自分とのふれあいの部分が、鮮やかに走馬灯のように思い浮かんできます。

昨日、お世話になった社長が59歳という若さで急逝されました。その方は私が会社を始めた時、安定的に仕事を発注してくれた最初の方でした。その会社の出入り業者だった私の友人の紹介がきっかけでした。

その時、25歳の私は経営に關してまったくの素人で、営業をしたことがないだけでなく、原価管理すら未経験でした。そんな危なっかしい私に、どのように仕事を請け負えばいいのかということから、社

ジーアンドエス社長 萩原 扶未子

員管理や諸手続きの仕方まで、親切に教えてくださいました。お酒が大好きで、夕方になると湯のみ茶わんでカムフラージュしながら仕事場で飲まれている、クリエイティブな業界らしく、味わいのある型破りなキャラクターでした。ふらつとつかがっても、嫌な顔をせずに相談相手になって

知人の訃報に想うこと

るとは想像もできません。改めて後悔することになってしまいました。突然といえば、何年前になりませんが、沖繩で事故に遭い、亡くなった友人の男性がいました。出会ったのは私が23歳の時。共通項は互いに生意気で、毒舌で、努力しない人が嫌いで、同じ年に金沢に

くれました。

その会社から請け負っていた仕事も終わり、私自身も仕事も忙しくなったため、いつの間にかうかがうこともなくなっていました。近くを通ると、「挨拶を」と頭をよぎるのですが、時間に追われて「そのうち」と過ぎていきました。

人の死を予知できないとはいえ、まさか59歳で急逝され

転動してきたこと。一回り以上も年が違ったのに、変に気が合いました。東京に転勤された後も、金沢に来ると「飲もう！」と連絡をくれました。

彼が知人の葬式に日帰りで金沢に来た日、お昼を一緒に食べることになっていました。「まだ、式が終わらないけど、途中で出るのは亡くなった方に申し訳ない」と、彼

から入院し、手術をした経験があります。運良く良姓でしたが、余命は誰にもわからないものです。「そのうち」なんて考えずに、思った時に行動しなければ。改めて彼らから、そう教えてもらった気がします。最後に、故人にいたたたたくさんの教えと思い出を胸に、ご冥福をお祈りします。